

# 「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20年⑬

前回のナマステ138号(2019年12月10日発行)の「タイ環境学習ツアー2019」その①の続きである。若林卓司さんの文に私が適当に写真をのせたものである。

若林さんと出会って20数年がたつ。バンコクのラジャトプラナコーン大学であった。いっしょにカオヤイ国立公園にいき、タイ人との通訳をしてくださった。年に一度一週間寝食をいっしょにいろいろ語り合う友人となった。ウタイタニー バンライのパンダキャンプのシリポンさんとも偶然以前からの知り合いであったことに驚いた。私たちの現地スタッフと失礼だが勝手に思っている。このキャンプのあり方や、ワークショップ等のテーマについても貴重な意見をいただき今日に至った。感謝である。

今年2020年のワークショップのテーマはどうしようかと中ゴミさんと話しているがまだ決まらない。今回は8月10日から13日世界自然遺産のフーワイカーケンでの1日目までを述べた。今回は14日、2日目を降を述べる。(中込 卓男)

## 「タイ環境学習ツアー2019」 その②

### 若林 卓司 日記から

8月14日

朝はいつものように管理事務所の近くのスプ・ナカサティアンの像の方へ歩いて行った。像の前ではスプと同じような持ち物を持ち、同じような格好をして剛君が写真に写った。これでこそ悪をくじく立派な私設レンジャーである。



毎回1人しかないので、古株のゴミゴメもいまだ栄誉あるその地位についていない。

宿泊所前の広場やここの広場でも2種類のシカが放されている。タイ語でヌアサーイというシカとラマンというシカである。このごろはトラやヒョウがこの辺りまで出てきて、狩りをやるようになり、結構おびえて、私たちの動きにも右往左往した。

この朝、よく見れた鳥はズクロコウライウグイスで若鳥一羽を含む家族で餌を漁っていた。



▲ズクロコウライウグイス

また、金属的な声のズアカミユビゲラをゴメさんとポンティップが追いかけてまわっていた。

また、剛くんが突然走り出して木の幹を見ているので、みんなで行くとピワハゴロモがいた。



宿泊所に戻り、食堂に出かけて、朝の食事を済ませた。シリポンさんは8食分の昼飯を作ってもらっていた。今日行くのはサツパッパーのレンジャー駐屯地を経て、ナンラム山である。今日もリンさんの案内だが、生き物を見つける素早さには舌を巻く。

例のように「ドーク・シャバー・ディン」と呼んでいる花が咲いているところで、車を降りる。地面から花だけが出ているので、以前の名前「地の花」、シャバーを取った方が気に入っているのだが、シリポンさんもリンさんも今回はそういうので、従うしかない。

この辺りにはキノコが多く、ゴメさんの出番だった。タマゴタケの見事なものもあった。



キノコを見れば私たちは食べられるかどうか聞きたがるが、リンさんの答えが洒落ていた。「1回だけ食べられます」みんな笑ってしまった。また、野生のホヤも咲いていた。ここからだらだら歩いてサップパーへ。シリボンさんは写真撮影がしたいといって、残ったので私たちは先に着いてしまった。待っても来ないので、リンさんに回りを案内してもらおう。

今朝、この駐屯地をゾウが通り抜けたそうで、その後を追った。木の幹に張り付いたような2メートル以上あると思えるヘビのミイラ化した死体。ノイさんの話ではキングコブラだという。すぐにヌタ場や水場が現れた。シカや野生のウシ、ウアデーンの足跡があった。ゾウの足跡、トラの足跡もあった。またゾウが砂地を掘った水飲み場も現れた。ここはすごいところである。夜になればサップパーは昼間ののんびりした風景から、一転して生存の厳しい世界に変化するのだ。



シリボンさんが到着したようだが、バイパスを通過して行ったので、そちらの方へ歩き出す。途中、あちこちに点在するゾウの糞から、キノコが伸び上がっているのがおもしろかった。

道の交わったところに来て、シリボンさんの姿がないので、私たちはさらに先を歩いていく。いい加減歩き疲れたところに車が到着。ここから一気にナーンラムの頂上下まで上がった。

山頂までの階段を上って、展望台へ。先に登ったリンさんから、「サイチョウ」の声。慌てて行くとちょうど3羽のオオサイチョウが飛び去るところだった。

頂上にある四阿で昼を食べる。去年もそうだったが、この便所の壁にトッカーが卵を産み付けていて、メスと思える個体が卵を保護していた。



展望台からは広大なフォーアイカーケーンが見下ろせた。実際はその一部でしかないが、はるか向こうの山を越えるとメーウォンやウンパーンへ行けると聞くと、私自身が足を踏み入れてみたい気がしたし、この辺りを通路にして活動していたタイ共産党やそれに賛同して行動を共にしたカレン族などの少数民族、さらには軍事政権に寄り添って「森に入った」学生たちのグループのことなどが頭をよぎった。



シリボンさんがまた行方不明になったが、パンダキャンプのハリナシバチを今以上に増やすとなると、花や花粉が必要になる。何か適当な樹木がないか探していたのだという。

帰りはナーンラムの研究所へ行く峠のところまで歩いて下りることにしたが、車が止めてあるすぐ近くでキノコが見つかった。シリボンさん、ノイさん、リンさんまでが何の躊躇もなく引き抜くのには驚いた。ここは国立公園よりも保護レベルの高い野生動物保護区である。なんと由々しき事かと思っただけ、ハット・コーンを前にしてはマツタケを前にする日本人と同じ心境なのだ。



私は10月ごろ、毎年、オートコーでハット・コーンを買う。1キロ600バーツと高いが、新鮮なのはてんぷらにして食べる。乾燥した売れ残りは安く買って、炊き込みご飯にする。どちらもおいしい。タイ人もこのおいしさのとりこなのだ。

峠のところから車に乗ったが、ここの木に大きな鳥が止まっていた。葉の陰にいたので、頭部はよく見えなかったが、私は大型のフクロウだろうと思った。そのときリンさんがカンムリワシだといった。ポンティップの撮った写真を見れば、その通りカンムリワシだった。



行きも帰りも荷台に乗っているリンさんの合図で、何度も車を止めて、鳥の姿を追ったが、鳥は木陰に逃げた後になるので、確認することはできなかった。しかし、色と体形から最も可能性の高い鳥、カンムリカッコウをはっきり

同定できなかったのは返す返すも残念だった。

車が宿泊所に着くころ、道の真ん中で女の子がカメラをこちらの方に構えていた。それで、私たちも車を降りた。リンさんの指さす方に鳥がいた。少し距離があったが黒くて頭部が赤い、大型のキツツキ、キタタキのメスだった。私たちはこの鳥を追って少し移動したが、女の子は我がグループに遠慮してか来なかった。いい写真が撮れたのだろうかとちょっと気になった。

ここでリンさんと別れたが、リンさんはここに勤めて20年になるという。奥さんもこの職員で、ナコンサワンの家に子供を預けているという。動植物の知識はどこで勉強したのかと聞くと、本を読んで独学したといていた。

宿泊所に帰って驚いた。裏側の網戸が開いているのだ。この網戸は上下に留め金があるが、下の部分が甘いのだ。部屋を出る前に、中に入れていたゴミ袋からごみが散らしている。口を開けておいたリュックからいろいろのものが引き出されている。スナック菓子は袋が引き裂かれて、中身がない。ひどいのは豆乳のパックを幾つか置いていたが、それをすべて飲んだようで、ベッドの上に敷いておいた、掛布団がびしょぬれになっている。さらに、カギのかからぬトイレに侵入して、洗面台に置いておいたものを物色した形跡がある。足跡が残っているのだ。ゴミさんの指摘で、玄関にサルに注意の掲示がしてあるのを見たが、いままでこんな侵入はなかったのだ。こんな被害を考えてみたこともなかった。

夕食を食べに川辺の食堂へ行き、インスタントのコーヒーを飲みながらくつろいでいると、テント場に沿った道を数珠つなぎに駆けてくるものがある。シカの群れだろうかと思ったが、イノシシだった。50頭ほどの大人子供の群れは、食堂で出る残り物やくすなどが目当てなのだ。



この大群を目の前にして、ゴミさんが昨日のあの一頭のイノシシはいったい何だったんだろうと呟いたが、心に染みた言葉だった。以前は薄暗くなった情景の中を川を渡るシカがいたし、向かいの林や草原にシカがよく出てきて、懐中電灯の光を集めて見たものだったが、この辺りは以前のように安全ではなくなったのだろうか、その姿を見ることが出来なかった。

今夜もビールを飲みながらの歓談は以前ほど盛り上がりなかった。みんな疲れているのだ。考えてみれば、このフォーワーカーケーンへ来るようになってから、15年近くになるのじゃないだろうか。みんな年を取ったのだ。疲れは年から来るようになってきたのだ。ジャコウネコの餌づけはこの夜もしたが、誰も写真を撮ろうなんて思っていなかっただろう。

## 8月15日

昨夜、シリポンさんから、早朝の出発を言われていた。朝ごはんもバンダキャンプに帰ってからだという。出発は6時半ごろになり、朝の探鳥はできなかった。ただ、ゴミさんは朝早く起きていたらしく、再びイノシシの大移動があったことを教えてくれた。

帰りも剛さんとノーイさんが荷台になった。シリポンさんは話好きで、運転しているときもしょっちゅう話しかけてくる。それで今回はハリナシバチについて質問してみた。本当にこのハチに関してよく知っていると思った。この前、ファミリー・フォーレストの発想が多く支持を得たことで、名誉博士の称号を得たが、このままいけばハリナシバチに関してその辺の学者よりはるかに上をいこう。バーンライの町に着くまで、私はその講義を聞き続けた。

朝ごはんの前にシリポンさんがちょっと来てくれというので、付いていく。ハリナシバチの巣に問題が起こっているのだという。ハチは自分たちにとって解決できない事柄が起こると巣を捨てるという。一つ目はもう巣を捨てた後のようだった。中には何もいなかった。二つ目はたくさんのガの幼虫が侵入しているのだ。この木は二つ穴があって、2種のハチがそれぞれ巣を形成しているというが、一つは多くの幼虫が中に入っているのであきらめるよりほかになんかいい方法はないといていた。いままでに、ハチがいなくなったり、このように巣を捨てざるを得なくなったのは10を超えていた。養蜂はただ待っていれば果報が転がり込むとは言えないものなのだ。

ちょっと遅い朝食の後、いよいよのところへ行くことになった。去年、シーナカリンダム湖の畔にあるカレンの集落へ行ったとき、シリポンさんからモー・トゥックの話は聞いていた。ウンパーンを中心にして、タイ共産党下で医療活動をしていた人だ。バンコクへ帰ってから、そのうち出かけなおそうと思っていたが、結局その機会がなかった。シリポンさんと今回の予定を話しているとき、今日の午前中が空いているのに気が付いた。カレンの集落へ雑穀等のインタビューに行きたいというゴミゴメの声も聴いていなかったのだ。独断でシリポンさんに連絡を取ってもらえるように頼んだ。

モー・トゥックの家はスパンブリー県にある。といっても、バーンライから車で1時間もかからなかった。人に聞き、家を探し当てる。モー・トゥックはカレンなので、カレンの血を半分引くノーイさんに尋ねてもらったが、留守である。近所の人は畑に行っているというのだ。裏の丘がリゾートになっているので、上に上がって、竹作りのバンガロー辺をぶらぶらしていると、それらしき人が探し当てた家に入ったので、私らもその家めがけて下りて行った。このとき、モー・トゥックは女の人だと分かった。ノーイさんが少しカレン語で話していたが、普通にタイ語が話せたので、ずいぶん気が楽になった。すぐにインタビューを始めた。



今年57歳になるという。医者になるきっかけを聞いた。モーは今いる家が生まれたところで、当時この辺りに4軒の家があり、家の前の道を共産軍が行き来していたので、荷を運ぶ手伝いをしていたという。その時はまだ12歳（1974）で、森の中の拠点へも行くうち、自然な形で共産主義の活動に加わったということだ。そして、医療活動をしようと思い、中国へ行き、ある地方の拠点で技術を教わったという。

今回インタビューに使った時間は短かったので、いろいろ聞くことが出来なかった。それでも、初めて共産主義活動に参加した人と話が出来たので満足した。ここだったら、いつでも来れるし、さらに同志の名前を何人も聞いたので、いずれ紹介してもらえと思った。

ゴミゴメは今回のインタビューに黙ってついてきてくれたが、ずっと気になっていた。遅くなったかやっと断りの話をする事が出来た。

パンダキャンプに戻って、しばらくして、シリワット、チンタナー両先生ご夫妻がパンダキャンプを訪ねてこられた。今年は日本人一行にバンコクで会えなかったからと、車でロップリーから来られたのだ。一緒に昼ご飯を食べた。



両先生が帰られてから、日本人は恒例のタイマッサージに行った。いつものように長時間のマッサージはできなかったが、3人とも爽快な顔をして戻ってきた。今日は木曜日である。定期市のある日である。ポータンさん

がパンダを高校に迎えがてら、市のあるところまで送ってくれた。例年より規模が小さくなっていったように思うが、それでも多くの人でにぎわっていた。

ゴミゴメの関心は相変わらず昆虫である。今回はコオロギやタガメやコガネムシでなく、セミの方に目が行っていた。その眼力に押されたようにポンティップが20パーツ分買った。私も一匹だけ食べて見たが、おいしいとは思わ

なかった。しかし、その後このセミを見る事がなかった。誰かが食べたに違いない。帰りはシリボンさんが迎えに来てくれた。

今夜のメインはスム・カーオ・レーンである。キーさんとイエンさんが用意してくれた食事も整った。パンダが帰って来、ポータンさんが職場のフィリピン人の先生3人を連れてきた。トゥー先生一家も来た。タヌさんも来た。

今回のスム・カーオ・レーンは新しいオリジナル曲を聞かせてくれたが、練習不足の曲もあったように思う。



▲スム・カーオ・レーン

私たちが歌う番になった。まず、フィリピンの先生が歌った。私たちはもう何年前タイで流行した「マイ・コーイ」という歌を歌った。ゴメさんの練習に裏打ちされた伴奏とみんなの流暢なタイ語は聞いている人を魅了し、パンダとトゥー先生のお子さんに私達も歌いたいといわせたくらいだ。



▲「マイ・コーイ」

剛くんはギターを抱えて「とんぼ」を独唱し、フィリピンの先生との距離がぐっと近くなった。



▲熱唱する剛くん

とりはゴメさんである。新しいレパートリー開拓に余念がないようで、ハーモニカ演奏の能力の高さを見せてくれたが、今年も去年に引き続きのセントルイスブルースがよかった。そしてこの歌を聞かなければバーンライに来た意味がない「イエスマン」が登場した。



10時を回るとだんだん寂しくなり、11時には後片付けを任されているノイさん以外いなくなり、私たちとスム・カオ・レーンの4人組でしばらく話し合った。このとき、以前から知りたかった歌の題名を聞いた。サラウィン河を歌った歌なので、インターネットでサラウィンで歌を探したかなかったのだ。カラワーンの一入、去年亡くなったモンコン・ウトックの「ソップ・ムーイ」という歌だという。来年はこの歌である。私たちはプレゼントのシャツをもらった。



▲「ドゥアンベン」を歌う若林さん

## 8月16日

朝食は昨日の夜出たミジンコ浮き草の卵焼きが再度出たので、おいしくいただいた。

パンダがまた私たちにプレゼントをくれた。ゴミゴメにはシャツを、剛くん、ポンティップ、私には帽子である。そのどれにもパンダが絵を描いてくれているのだ。今朝の3時までかかったといっていた。今年、大学の建築のデザイン科を受けるそうだが、合格は間違いない。

シリボンさんがパンダキャンプにある竹株の中で最も大きい竹株の前で記念写真を撮ろうという。もう少しすればウタイタニーで一番大きな竹株になると期待しているものだ。男連中が並んでパチリ。



最後にシリボンさん、キーさん、イエンさんに別れを言い、ポータンさん、パンダも一緒にバンに乗り組んで、一路ダンのいるカンペンセーンのカセサート大学を目指した。

大学ではダンが昆虫館に案内してくれた。それと、チョウ園にも案内してくれた。ただ、この園のチョウはまだ一

匹も羽化していないらしく、園の外で何匹か目にしたのは面白かった。

お腹が減って来ていたので、ダンに学食に案内してもらった。みんなそれぞれ食べたいものを注文し、ダンとはここで別れた。ダンは昆虫学を専攻していて、将来はお父さんを助けたいといっているが、専門的な道が歩ける青年である。今年も短期間だったが、名古屋大学の招待留学生として、日本へ行っている。



▲左からパンダ、ダン、若林さん

バンコクに入ってから、道が少し込んだようだが、寝ていてあまり気づかなかった。今年のウタイタニー詣もこれで終わった。なかなか味の濃い取り組みだった。

## 8月17日(この日はナカゴメ日記)

バンコクのプラナコーン・グランド・ビューホテルにもどってきた。ゴミ、ゴメ、剛の3人で日中を過ごすことになった。16:00にホテルでチナタッタさんと待ち合わせまでの時間である。

剛くんが寺に行きたいというのでバンコクで有名なワット・サケットに行くことにした。バスとスカイトレイン、タクシーを使ってなんとかバンコクの中心部まで行った。



ワット・サケットは黄金の丘で名で知られる低い丘で、頂上には金色に輝く仏塔が立っている。暑い中約300段のらせん階段を上った。

歴史あるバンコク市街の展望が広がった。今のように高層ビルのないアユタヤ時代(1350~1767年)この塔からの展望を垣間見た。

16:00にチナタッタさんと合流して、ここ数年通っている豊田勇造の音楽ライブに出かけた。エカマイにあるサバイチャイ・オールデイズで、毎年この時期に行われる

ライブである。ここでもビールを飲みながらである。



豊田勇造は70歳。京都生まれで、ずっとメッセージソングを歌い続けている。1984年、日本ツアー中のタイのカラワンバンドと知り合い、翌年にはカラワンの招きで、友部正人と共に3週間タイでのライブツアーを行う。この頃からタイと日本を行ったり来たりするようになる。

タイにも住んでいたことがあり、タイ語でカラワンの「ドゥアンペン」(満月)を唄ったが、初めはひどい発音で笑われたと言っていた。私もバンライ、パンダキャンプの宴で唄うことがあるが難しい。まあ頑張って、そのうち通じるようになってと励まされた。



2014年9月、タイから10年ぶりにカラワンのスラチャイとモンコンを招き、東京・神奈川・山梨・京都・神戸の各地でコンサートを行う。この時私は神奈川のイーサン食堂のライブに行き初めてカラワンの2人に会った。「ドゥアンペン」(満月)を情感豊かに独特の節回りで唄うスラチャイの唄と民族楽器のピンを巧みに演奏するモンコンに感動したことを覚えている。

バンコクの夜はこの日も早く過ぎた。

## 8月18日

7時半にプラナコーンヘゴミ、ゴメ、ゴウの三人を迎えに行き、サムットプラカーンの自然資源環境保護・学習活動センター(ちょっと省略)の前面にある干潟へ行った。ちょうど引き潮だったので、ぼつぼつ戻って来ているシギ・チドリが見られた。



まだ夏羽なので、見やすかった。マングローブ林から干潟へ伸びている高度感のあるコンクリートの遊歩道を進んでいると、シロガシラトビが悠然と飛翔していたり、ナンヨウショウビンが大きな声を上げて飛び回っていた。私らは望遠鏡を持っていないので、確認できたシギ・チりは多くない。アカアシシギ、オグロシギ、キョウジョシギ、チュウシャクシギ、サルハマシギ(写真に写っていた)、メダイチドリ、シロチドリ等。ポンティップの写した写真にはキョウジョシギの一羽の足にP33の標識番号がついていた。



▲シロガシラトビ



▲鳥を撮るポンティップさん

センターの北側にも遊歩道があるので、そちらにも行った。今日は人が多く、ポンティップの聞いた話では、マングローブの植樹に来ているということだった。



▲ナンヨウショウビン

11時過ぎに、揚げソムタムの店へ行った。ここで歓談しながら昼を食べ、1時間ほど過ごす。その後、私らが行った干潟の運河を挟んで南にあるパンタイノラシン禁猟区へ行った。以前見たことのある、保護されているカワウソを

見に行ったのだが、林野庁（最近名前が変わり野生動植物国立公園局という）の方へ移された後だった。



▲揚ナムタムの店で昼食。おいしかった。

子供の時から飼われているカニクイザルが一匹だけだった。

来る時見たコーカムの塩田には塩の山が見られなかったが、どこかないかと探してみた。するとあった。作業中だったが、許可を得て見せてもらう。みんなバチバチ写真を撮る。作業員の人のよさそうな一人が塩がいるかと私の手に山盛り塩田の塩を盛ってくれた。みんなで食べてみるが、市販されている工場で作られた塩とはちょっと味わいが違う。ゴメさんは袋に一杯詰めてもらっていた。



まだ少し時間があったので、近くにあるパンタイノラシンを祀った神社へ行った。像の安置してある建物が鬮鶏のニワトリの焼き物で埋まっているのに驚いた。ナレスワン大王だったらわかるが、どうしてなのか、ポンティップがこの人に聞いていたが、お参りに来た最初の人かニワトリの焼き物を持って来てから、随時このようになったということで、本当はパンタイノラシンとは関係がないらしい。



私はパンタイノラシンのことはよく知らないが、ポンティップの話ではアユタヤ時代の軍の船のかじ取りで、誤って、ぶつけて船を沈めてしまったという。パンタイノラシンは王の船を沈めた責任を取って自害をしようとしたらしいが、いさめられたという。しかし、この責任感の強い男

が自殺を計れば、その霊は悪霊になると判断され、処刑されたという。

社内にはその場所があって、今でも儀式などでかぶられる帽子状のものが置いてあった。その下を時計回りに3周すれば、人生の成功者になるそうで、多くの人がぐるぐる回っていた。ポンティップの後をゴメさんも回った。おそらく、こんなことをやったのは日本人で初めてだろう。



ゴミ、ゴウはシアムシーというタイ風のおみくじ引きをしたが、日本風に言えば「小吉」が出たようなものだろう。

4時にプラナコーンに帰らなければならないので、隣接されている土日に開かれる市場で「アイテム・ポーラン」（昔のアイスクャンディー）を食べて、帰途に就く。道が少し入ったので、プラナコーンに着いたのは帰らなければならない4時の5分前だった。



今回も楽しい時を持てたので、本当に良かったと思う。剛くんはあまりしゃべらないが、いっぱいいいところを持っていると思う。また来年である。夜は「ソップムーイ」の他にもう一つ知りたいスプ・ナカサティアンの歌を探した。「สืบทอดเจตนา」というカラバオの歌だった。